第 69 回市町村対抗「かながわ駅伝」競走大会の展望

（資料提供：神奈川陸上競技協会）

ふるさと選手の活躍が優勝への鍵

・横浜市の５連覇に黄色信号。昨年中止となった大会と大幅に入れ替えたメンバーで臨んできた。ベテランの富張（横浜市陸協）がチームをまとめており、宮尾（専修大）、稲毛（國學院大）など若い伸び盛りの大学生の奮起を期待し、伝統の力で連勝に挑んでもらいたい。

・川崎市は久々に優勝を狙えるメンバーを整えた。矢澤（日清食品グループ）、佐藤（ユニクロ）の２大エースを投入し、他の区間で少々遅れても、６・７区で一気に逆転するだけの陣容である。若い濱野（専修大）、五十嵐（東京経済大）の勢いと高校生で県新人戦 5000m優勝の橋本（法政二高）が短いスピード区間で、本来の力を発揮できれば優勝に最も近いチームとなるだろう。

・相模原市は、帰省地参加選手　高谷（ＪＲ東日本）のスピードを活かし、小町（日本体育大）、辻田（国士舘大）をポイントに、若さあふれる高校生と竹内（大和高校教員クラブ）、金子（相模原クラブ）のベテランがかみ合えば３位以内の入賞が十分可能である。

・横須賀市は、エースの小泉（日本体育大）の復調がチーム浮上の大きな鍵を握っているだろう。そんな中にも、昨夏のインターハイ 3000m障害で３位に入賞した滋野（横浜高）や佐久間（藤沢翔陵高）等の若い高校生の底上げと充実している女子区間もあるので上位をおびやかしてもらいたい。

・平塚市の帰省地参加選手、鈴木（JR 東日本）と、帝京大のシード権確保に貢献した杉山を中心に、ロードに強い伊澤・矢後（平塚市役所）と、佐野・杉本（藤沢翔陵高）コンビにも期待が持たれる。過去最高２位入賞を目標としたい。

・藤沢市は、プレス工業３人の実業団トリオの出来いかんがポイントとなる。中でも梶原は本県ナンバーワンのランナーで、先日の全国都道府県対抗男子駅伝競走大会でも、元旦の全日本実業団対抗駅伝競走大会でも好走するなど、今回の走りもさらに期待される。帰省地参加選手の槻澤（警視庁）をはじめ、若い高校生が短い区間を受け持ち、スピードを活かしたフレッシュな走りに期待したい。

・茅ヶ崎市にも２人の帰省地参加選手のしっかりした走りに期待するとともに、櫻井（国士舘大）や大西（藤沢翔陵高）、小室（鎌倉学園高）らの好走で３位入賞を目指したい。

・第 67 回大会で準優勝を飾った小田原市も虎視眈々と優勝を狙っている。絶対的なエースはいないが、第 67 回大会で区間賞を獲得した権守・樽木（小田原市役所）コンビと齋藤・瀬戸（小田原ＮＲ）コンビ、さらには女子区間を受け持つだろう鈴木（玉川大）や中学生区間の髙杉（泉中）と穴のない布陣が組まれており、混戦になれば十分にチャンスはある。

町村の部について

各町村のベテラン勢は、毎年この「かながわ駅伝」をレースの最大目標に練習を続け、仲間の絆を大切にし、ランニング・ジョギングを生活の楽しみや区切りとしてとらえ、休日等の合同練習に追い込み練習（ポイント練習）や走り込みで大会に備えている。

・第 67 回大会で優勝した愛川町は、ベテランの山口（愛川町役場）がチームを引っ張る。そこに若い苅田（拓殖大）・岩嵜（駿河台大）らが実力通りの力を発揮すれば２連覇も可能だろう。

・葉山町はふるさと選手の川村（プレス工業）がチームを引っ張り、中学生区間と女子区間も充実しているので若い高校生が、その伸び盛りの力を存分に発揮できるかにかかっている。

・二宮町は中学生区間、小早川（浜岳中）が先頭でタスキを運んでくるだろう。田中健介（松蔭大）は関東学連選抜にエントリーされた選手でもあり、２区が終わってもトップ争いを演じるかもしれない。中崎（慶應義塾大）や高校生の小坂太我（藤沢翔陵高）をはじめとした選手が手堅く走り切れば、町村の部初優勝も不可能ではない。

・大磯町は大川（神奈川大）がチームを引っ張る。昨年大会が実施されていれば町村の部初優勝に最短距離であったが、本年は、３位入賞狙いであろう。村本・平原の平塚市役所コンビが鍵を握っている。

・箱根町は、「かながわ駅伝町村の部で優勝しよう」を合言葉にここ数年取り組んできた。帰省地参加選手の石井（平塚市役所）がチームのリーダー。若い高校生トリオの大泉（藤沢翔陵高）、越阪部（相洋高）、岡田（日大三島高）の出来いかんである。特に大泉は平成 25 年度の県高校駅伝４区で区間新記録を出したが、その後故障を理由に、全国大会を走れなかったこともあり、その回復振りがチーム全体の浮沈の鍵となろう。

各区間の見所について

第１区（3.0km・男子区間[中学生]）

綾瀬市の鎌田（綾瀬中）、二宮町の小早川（浜岳中）、厚木市の山本（東名中）の全国都道府県対抗駅伝競走大会に出場した３人の争いが激しいだろう。昨年までより 100m 長くなりながら、平坦部分が多くなり、ラストスパートをかけるタイミングの良かった選手が区間賞を取るだろう。

第２区（9.7km・男子区間[高校生以上]）

各チームは、エース級を投入し勝負に出てくる。優勝を狙う川崎市は矢澤（日清食品グループ）か。相模原市の高谷（ＪＲ東日本）、藤沢市の梶原（プレス工業）のスピードランナーがゴボウ抜きをしてトップ争いに加わってくるだろう。この２区を終わった時点で、改めて駅伝の再展開という意味を含め、抜かれた選手も気落ちすることなく挑戦し、粘ってもらいたい区間である。

第３区（8.2km・男子区間[高校生以上]）

ほぼ平坦で走りやすいコースで、２・３区を長い区間としてとらえ、上位争いに絡む作戦に出てくる区間である。川崎市は、高校生のスピードランナー橋本（法政二高）あたりか。小田原市の権守（小田原市役所）は一昨年の区間賞獲得で、再びトップ争いに加わってくるだろう。平坦で、新人の登竜門区間として、スピードのある高校生が臆することなく挑戦し、自信を培ってもらいたい区間である。

第４区（2.7km・女子区間[中学生以上]）

2.7ｋｍと平坦で距離こそ短い区間であるが、思いの外、記録的には差の大きくつく区間である。ここでは、秦野市の寺内（秦野高）、小田原市の鈴木（玉川大）、横浜市の古谷（白鵬女子高）を中心に区間賞争いが展開されよう。町チームの中学生も自分の潜在能力を存分に発揮して、先輩の選手にくらいついていって欲しいと願っている。

第５区（7.2km・男子区間[高校生以上]）

スタートから中継所まで、ダラダラとした登坂が続くこの区間は、一般区間で 7.2ｋｍと最も短く、スピードを活かすことができる区間である。この区間が終了するころには、川崎市が先頭に立っているのではないか。各チームとも高校生の起用が多い中で、実業団や大学生に勝る快走を期待したものである。なお、第 67 回大会では、横須賀市の高校生　畔柳（当時、藤沢翔陵高）が区間賞を獲得している。

第６区（10.7km・男子区間[高校生以上]）

本駅伝最大の難コースで最長区間である。この区間の出来具合がチームの浮沈を大きく左右する。２つの大きなアップダウンがあり、中でも中間点６ｋｍを過ぎ、7.6ｋｍまでの真名倉坂は、過去に幾多の名勝負を展開してきた。各チームとも帰省地参加選手など、エースを投入し、誰が区間賞を獲るのか楽しみである。平塚市の杉山（帝京大）、川崎市の佐藤（ユニクロ）、茅ヶ崎市の石原（新電元）、小田原市の樽木（小田原市役所）、座間市の三田（国士舘大）らの快走に期待したい。

第７区（10.0km・男子区間[高校生以上]）

スタートから１ｋｍは登坂だが、全体的には下り坂が多く、スピードランナーが活躍する。一昨年、区間新で爆走した平塚市の鈴木（ＪＲ東日本）が今回も快走するだろう。優勝を目指す川崎市は安定した大学生の濱野（専修大）を配し、逃げ切りを計るだろう。１分近い差をつけておかないと平塚市の大逆転もあり得るかも知れない。各チームとも繰り上げスタートが多いと思われる６・７区は一瞬も気が抜けない粘走がチーム成績に繋がる。